

2000年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：31 カ国

応募総数：423 作品（子どもの部 268 作品、若者の部 155 作品）

文部大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『平和の文化と子どもの使命』
ジェイソン・クロウ（米国）13 歳

<若者の部>

- 『平和』
マイヤ・シャムルシャノフ
（カザフスタン）23 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『よりよい世界のために出来ること』
大西 美緒（日本<米国在住>）11 歳
- 「『平和な星』地球が輝く二十一世紀へ」
吉野 賢譜（静岡県）10 歳

<若者の部>

- 『平和の文化を生きる最初のグローバル世代』
ビクトル・ホセ・モスコソ・ポルティージョ
（グアテマラ）25 歳
- 『平和学の確立を』
後藤 薫（岐阜県）20 歳

2000 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 文部大臣奨励賞（最優秀賞）

平和の文化と子どもの使命

（原文は英語）

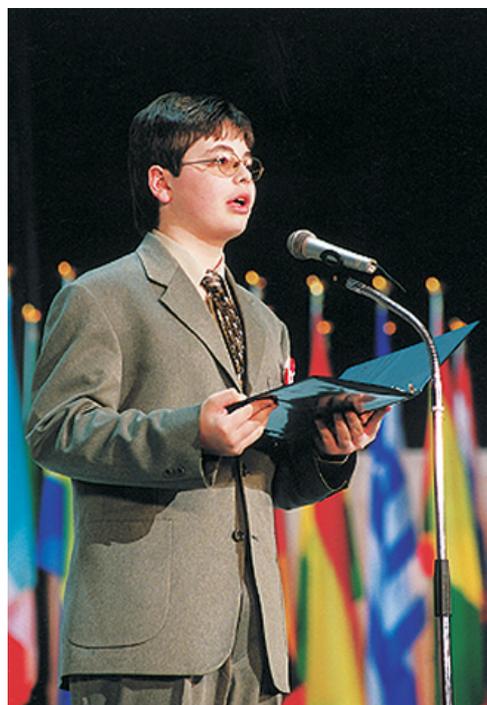
ジェイソン・クロウ（13 歳）

米国インディアナ州ニューバーグ市

スカイ・フライト・アカデミー（自宅学習）

未来。やがて来る果てしない夢の世界。しかし、平和が現実にならない限り、夢が実ることはありません。平和な世界においては、競争はなく、暴力はなく、戦争は教科書の中でしか聞かれないものになるでしょう。この物語的な世界を実現するには、僕達の生活のあらゆる場面で、平和を成功させなければなりません。このプロセスは、僕達が平和は単に戦争がないだけの状態ではない、と気づいた時に始まります。平和は人類一人一人の生き方であり、あらゆる生命が尊ばれる文化です。

若者は明日のリーダーです。僕達は既に若いリーダーであり、平和の文化の推進に貢献できることがたくさんあります。若者には多くの大人が失った理想、エネルギー、創造力があります。手段と機会を与えられれば、若くても世界を変えることができます。皆がちょっと考え方を



だけで、平和の文化に近づくことができると思います。それには二十世紀的思考方を更新しなければなりません。新千年紀においては、真の平和は、寛容の態度よりむしろ賞賛の精神を要し、僕達が違いをさて置くのを止め、それらを抱擁することを学んだ時にやってくる、ということに気づかなければなりません。僕達がお互いの違いを讃え合い抱擁して初めて、多様性を持ちながら和合して生きることが矛盾したことでなく、平和な状態であると理解するのです。

さらにテクノロジーのお陰で、僕達は道を隔てた隣人のみならず、地球上いたるところに隣人を持つといった、あらゆる生命が他の生命に依存する環境に住んでいます。もはや、グローバルに考えローカルに行動することはできず、むしろ、グローバルかつローカルに考え行動しなければなりません。

では、平和を推進するために地域レベル、全国レベル、そして、国際レベルで、若者に何ができるでしょうか。地域的には、子ども達が平和について学び、地域でその知識を活用できるようなピースクラブや、様々な文化の奉仕クラブに参加したり、自分で始めたりできます。全国的には、自分達の

要望を議員や大統領に表明したり、SAVE（全国反暴力生徒会）のような全国組織に加入したりできます。国際的には、インターネットを利用し、平和に関するホームページを作ったり、オンラインの国際討論会に参加し、多文化間のネットワークを築くことができます。様々な国際的な若者組織に参加することもできます。

僕自身、平和づくりにかなり活動的です。十歳の時、ボスニアのチェロ奏者の話を聞きました。彼は罪のない人々の大虐殺を目の当たりにし、行動しなければならぬと決意しました。次の日、彼は現場に赴き、狙撃兵の銃撃の中でチェロを弾きました。彼の音楽の調和は社会の調和を表し、戦争に対する唯一の答えを示しています。この教訓を生かさなければならぬと決心した僕は、地元の大学で平和のためのチェロ・コンサートを企画し、その後、大虐殺から五年目の日に「ハーモニー・イン・ザ・パーク」という追悼コンサートを企画しました。

十一歳で、平和推進のために文化を超えて若者を一つに集めて力を与えることを目的とした、非営利団体「チェロは鳴り止まない」を設立しました。「戦争や殺戮はもうたくさん。世界中の子ども達は平和や調和を望んでいる」というメッセージを込めて、ボスニアに平和の彫刻を贈りました。また、僕が発行している国際新聞「ザ・インフォーマー」や、インターネット、学校、州、国、そして国際レベルの会議でのスピーチを通じて、何百もの若者に呼びかけ資金集めをしてきました。

十二歳で、「平和のための若者 2000」という多国籍の若者の代表団を組織し、彫刻の除幕式の際、ボスニアの若者と交流し平和づくりに携わりました。去年は、多文化圏の中高校生のグループ「ユース・フォー・ハーモニー・イン・アクション」を創り、「多様性を持ちながらも団結して」臨むことにより、調和して働くことができることを地域の人々に示してきました。

僕は、大使や調停役や、大統領になろうという長期目標はありません。しかし、職業が何であれ、僕の本業は常に平和づくりであるでしょう。これからも引き続き、手記出版、会議でのスピーチを通し、より多くの若者を行動に駆り立てていきたいと思えます。

僕達は、かつてないほど、世界の未来、平和の未来が子ども達にかかっているという時代に生きています。ガンジーは、「世界が真に平和になるには、子ども達から始めなければいけない」と言いました。僕は、「世界が真に平和になるには、子どもが始めなければならない」と言いたいです。

2000 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部大臣奨励賞（最優秀賞）

平和

（原文は英語）

マイヤ・シャムルシャノワ（23 歳）

カザフスタン

ロシア語・英語教師

平和 — 平和を語るとき、私の心には母の優しい目が浮かび、子どもの笑い声が聞こえ、静寂と安らぎが充ちてきます。平和は私のアパートの静かな時計の針の音、道行く穏やかな人々。平和は頭上の輝く星、悲しみも苦悩もない地球。

このように書きつつも、ユーゴスラビアのどこかで、お腹を空かした五歳の少女が泣きながら人形に八つ当たりしていると思うと、ひどく不公平に思えます。同じ年頃の何百万人もの子ども達は、平安に暮らしているというのに。人間には、空気、海、星、草原、花が必要です。笑顔の一つ一つ、花の一輪一輪、美の一粒一粒が必要です。私は戦争を憎みます。人間は幸せになるために生まれてきています。これは真理です。そして、地球は真理を試す場所なのです。

平和はどのようにしたら達成できるのでしょうか。答えが見えなくとも、まずは自分の心と魂の中に平和を呼び起こすことが必要です。

新千年紀に入った今、私たちは地球を一新しなければなりません。現代の人間は魚のように泳ぎ、鳥のように飛ぶことはできますが、人間らしく生きることができていません。自らを滅ぼす危険な存在となっています。毎日、植物を一種類失い、毎週、動物を一種類失っています。先祖代々、明るい未来を信じ、人生を愛し、平和な生活を夢見ながらも、そのために戦い、時には命を失ってきました。

しかし、私は信じたいのです。私達の世代は単なる殺人者ではないと。人間の心の持つ優しさの力を信じたいのです。私達には豊かな文化遺産もあります。こんな話があります。真っ暗な夜道を二人の男が家に向かって歩いていました。一人は下を向き泥道ばかりを見て歩き、もう一人は、上を見上



げ星々だけを見て歩いていました。平和を達成するには、希望と信念を持って前だけを見るのが大切だと思います。思考力や創造力があるため、人間は自分たちを最も優れた生き物であると思っています。しかし、感じ愛することができる心を持っていることを忘れています。心の優しさの力に目を向けましょう。

アメリカの二人の少年の記事を読んだことがあります。彼らは道路の脇に立ち、行き過ぎる車に笑顔で手を振りはじめました。手を振り返す運転手があります。会釈を交わし幸運の願いを送る。それだけです。他愛もないことです。しかし、千台のうち九百九十台の車が応えてくれました。同様に、道端で幸運と平和の願いを送る少年たちは世界中至る所にいます。彼らの優しさが力となって世界中で働いているのです。

平和はどのようにしたら達成できるのでしょうか。人々が互いに、一日を笑顔で始めることです。

私の国であるカザフスタンは、人口は約千六百万で、半数がカザフ族、他は、ロシア系、ウクライナ系、ドイツ系等です。私のピースクラブには、いろいろな国籍の子どもがいて、平和な国の良い典型だと思います。私の誕生日の五月一日は、カザフスタンで様々な国籍の人々が団結を誓う日になっています。戦争の多くは国の違いから起こるものなので、これは、私にとって自分の使命を現していると思っています。

平和はどのようにしたら達成できるのでしょうか。あらゆる人が自分の好きな仕事をし、文化を大切にすることです。なぜならば、どんな国の文化でも平和を理念としているからです。

私のピースクラブは、カザフスタンで最初の子どものための平和クラブです。二月には二十人だった子どもメンバーが、五月には四十人になり、地元の先生達にこのクラブのことを伝え、新聞でも紹介されました。五月と六月には、退役軍人や子ども達のために、戦争反対のコンサートを開催しました。カザフスタンは、核を持たないことを決めた最初の国の一つです。すべての国がそうすべきだと思います。

私は、すべての戦争が無くなり、多くの人が喜びに満ちて、平和の彫刻のもとに集まり、祈りを捧げる、そんな日を夢見ています。私は、坂を歩き、青い空に鷺をみつけます。鷺は自由と平和のシンボルです。私は、自分の子ども達が幸せと自由のために戦うことがないことを望んでいます。私達は皆一つです。私達の手の中に強さも優しさもすべてあるのです。

よりよい世界のために出来ること

(原文は英語)

大西 美緒 (11 歳)

日本<米国ニュージャージー州リッジウッド市在住>

ジョージ・ワシントン中学校

今の世界の様子を考えた時、一番あてはまる言葉は「平和でない」という言葉でしょう。残念なことにその実体を表現するのは、もっとがっかりするような言葉です。例えば、危ない、不快な、恐ろしいといった（楽しいところもあるけれど）そういう言葉です。私の意見では、今の世界は充分平和ではなく、完全に平和であったことはかつて一度もないと思います。常にどこかで、戦争や差別、偏見といったひどいことがおこなわれています。そして、世界中の国々で次々に問題が起こっています。これらの問題は必ずしも大きな問題ではありませんが、我々の世界に影響を与えるものです。そして、後でより大きな問題に発展する可能性があります。私は 21 世紀の世界は、常に平和と調和に満ちた新しい世界に変わらなければいけないと思います。この地球に住む全ての人々が、私たちはみんな平和に暮らしていると誇りを持って言えるような世界に。又、どんな理由があっても不平等な扱いを受ける人がなく、戦争のない世界に暮らしたいと思います。

平和という言葉には、様々な意味があると思います。平和とは自由であり、みんなが平等な扱いを受けること、他人を助けること、やさしさ、そして、何よりも世界中の人々の目的であり、夢であるということです。人々が、平和の世界を目指しているという意味では目的であり、遠い希望であるという意味では夢であるのです。やさしさが、価値を持つようになった時、世界は平和になったといえるでしょう。ある意味で、平和は愛でもあり、人類のための神の計画であると思います。

世界が完全に平和になるには多くの時間と努力が必要であると思います。簡単なことではありませんが、そのため、私たちにできる小さなことがいろいろあります。しかし、どんな小さな変化を起こすにも、みんな一緒に力をあわせなければなりません。世界をよりよい所にする方法の一つは、まず、人々が過去の出来事を忘れることです。これは、過去の人々を忘れるということではなく、過去に起こったひどい出来事を考えないようにするという事です。例えば、中国人が、かつて日本人が彼らの先祖にしたひどいことを思うと日本人に対して怒りを持ち、仕返しをしたいと思うかもしれません。このような小さなことが戦争にまで発展しかねません。あるいは、アフリカ系アメリカ人は、白人が彼らの祖先に奴隷制を強いていかに扱ったかを思うと、悲しみ、白人に対しやり返したいと思ひ、問題になるかもしれません。私が思いつく、世界を平和にするもう一つの方法は、みんなが歩み寄り、互いを同等に扱うことです。これは、人を人種で判断したりするのではなく分かち合うということ

す。ある人が全てを持ち、ある人が何も持たないということがないように、世界は常に歩み寄ることができるのです。これらの二つのことは偏見や差別や、戦争等多くのことを解決できると思います。

私が、今言ったようなことを実行したとしても、あらゆる人がそうしない限り、世界を大きく変えることは出来ません。平和な世界をつくるのがいかに難しいかを表しています。でも、私のような子供達でも、親を説得することができます。私の友達は、二軒の家の中に住んでいます。左側には、日本人の家族が住んでいて、右側には韓国人の家族が住んでいます。各々、私の友達と同じ位の歳の子供がいて、三人はみんな友達です。しかし、韓国人の女の子の親と日本人の女の子の親はほとんど敵同士のようなのです。だから、自分の子供たちが互いに遊ぶことを好みません。そのため、彼女達は一緒に遊ぶことができないのです。このような小さなことも、世界の平和を損ねているものです。三人の子供が、それぞれの親を説得すれば、お互いに遊べるようになり、親同士も良い友達になれるかもしれせん。

このような話は、世界が平和であることがいかに大切かを私に教えてくれます。そして、私が大きくなったら、世界を平和な場所にしたいと思います。あらゆる人が平等であり、いかにやさしさが大切かということ、はっきり示したいと思っています。平和は私にとって、大切な希望であり、人生の目的であり続けるでしょう。大きくなって平和な世界を見ることが待ち遠しいです。私はいつも、平和な世界が来ることを信じているし、決して、自分の信念を捨てないでしょう。

「平和な星」地球が輝く二十一世紀へ

(原文)

吉野 賢譜 (まさつぐ) (10 歳)

静岡県藤枝市

高州小学校 5 年

「ウワー、ハエがいっぱい」

「きたないなあー」

これがぼくが中近東の難民の子供たちの姿を見た時の第一声だった。戦争が長く続いて親が亡くなったり、家がやけたり、食べ物や着る物もなく、学校にも行けない子供たち。お母さんのおっぱいがあまり出ないので赤ちゃんはやせ細っていて泣き声も出ない。病気になっても十分な薬や注射もなく次々に死んでしまう。ハエが子供の頭や体にたかかっていてぼくは、腹が立ち悲しくなった。

それに比べぼくは、毎日何の不自由もなく生活している。何で同じ地球に住んでいて幸せな人と不幸な人がいるんだろう。(本当に神様はいるのだろうか)と心の中で叫びたかった。戦争はなぜ起こるのか。平和とは何か。どうすれば平和な世界を作れるのか心の奥からぎもんがわいてきた。戦争をしたい、人殺しをしたいと思っている人はだれもいないだろう。ぼくにはわからない。発展途上国と先進国では貧富の差があり、支配する国と支配される国ができるのか。また、国と国との利害があるのかもわからない。国同士の歴史上のいがみあいから戦争になることもあるだろう。

ぼくは、二十一世紀は戦争のない平和な世紀になることを望んでいる。なぜなら、二十一世紀はぼくたちの住む世紀でもあるし、戦争が起きたら人類の未来はないと思うからである。では、平和とは何だろう。ぼくは、生命が安全で生活に不安がなく、安心して暮らせること、国と国が文化やそこに住む人々を尊敬しあい、理解しあい仲良くすることだと考える。

それでは平和な世界を築くためにぼくにできることはあるのだろうか。なくても役に立ちたいと思う気持ちが、今いっぱいふくらんできている。将来医者になるのがぼくの夢だ。国際協力としてボランティアでもいいから、困っている国に行きついでに治りようをしながら世界の国の人々が自由に心の交流ができるような縁の下の力持ちになりたい。手紙や救援物資を持っていきついでに、現地の子供たちを集めて世界の文化や病気の予防などを教えたりする。そして、自分の国にほこりを持たせほかの国を尊敬することの大切さを教えたいと思う。世界中の子供たちの交流が広がれば、友達の輪が鎖のようにつながる。この子供たちが大きくなったら戦争なんて考えないと思う。一人一人の力は小さくても、みんなが心をつなげて力を集めれば不可能も可能になると思う。

人間にはみんな生きる権利があるんだ。安心して暮らす権利もある。世界中の人が国レベルで考えないで世界レベル地球レベルで考えていくことが二十一世紀を「平和な世紀」へ導くことだと思う。ぼく一人では無力だが、ぼくにしかできないこともあると思う。

あの八工の中に飛びこんでいこう。

「世界がより良い場所になるように」

平和の文化を生きる最初のグローバル世代

(原文は英語)

ビクトル・ホセ・モスコソ・ポルティージョ (25 歳)

グアテマラ

「私は市民である、アテネではなく、ギリシャでもなく、全世界の。」…ソクラテス

人類、そして自然の未来は私たちにかかっている！

私たちの世代は、人権を尊重し、生活をゆたかにし、社会福祉のためにともに働く個人が集まった平和な地球社会を 21 世紀に築くだろう。私たちが受け継いでいる記憶には名誉もあれば不名誉もあるが、歴史の教訓を見直さなければならない。機知と勇気と団結をもって、過去の過ちを補い、財産をもっと有効に活用し、信念をもち明るい未来のビジョンを持たなければならない。

私たちの祖先は、100 年前と 50 年前に、残酷さと死の影を残す世界大戦を体験した。広島の大原爆、ヨーロッパのホロコースト、南アフリカのアパルトヘイト、そして、グアテマラの大虐殺といった最も暗い紛争の記憶が 20 世紀を覆っている。未来世代の穏やかな生活を築くため、私たちは子孫に、暴力を避け、戦争を拒絶し、対話と平和を選びとる新しい倫理的な意志を受けなければならない。

私たちは、豊かな世界に住む貧しい社会である。科学的、人間的進歩にも関わらず、政治システムや市場経済は私たちのモラルの原則に従って機能していない。貧困は、資源や知識や創造力の欠如の結果ではなく、不平等、排斥、団結と正義を欠いた国際関係、人間関係によるものである。富をより平等に分配し、倫理的な責任を持つことによって、社会の全ての構成員の生活水準を上げることに取り組まなければならない。

自然の限界や環境のバランスを視野に入れ、豊かな生物学的、遺伝学的多様性を尊重した上で、責任をもって科学と倫理価値の責任ある融合をはかることにより、人々の生活を改善することができる。テクノロジーは、グローバルビレッジをつくることを可能にし、私たちは他の文化、宗教、性別、世代から学ぶことができるようになった。平和、対話、寛容、団結、自由、民主主義、そして、異文化間の相互理解と尊重を推進することで、基本的人権および、国家間そして各国内のバランスを確保するための環境をつくり出すことができるだろう。国際コミュニティ、各国政府、NGO、そして、市民社会の努力が、相乗効果を生むことで、私たちの惑星をこのように多様で人間性に富んだものにしてくれる「違い」というものを歓迎し喜び合えるようになるであろう。そして、私たちをユニークで素晴らしい方法で幸福と進歩に導くであろう。

私の国は小さく貧しいが、文化と様々な自然に富んでいる。私は、内戦で、家族を一人失い、地域の仲間を失い、何千もの国民が大虐殺された。しかし、私たちは暴力が紛争の解決策ではないことを学んだ。一方、寛容と対話によって、私たちは協力し、不平等を減らし、お互いの信頼関係を取り戻すことができる。私は、平和と民主主義のための若者のムーブメントのリーダーとして、ボランティア活動をしている。又、若い世代の生活環境を調査したり、社会起業家の国際ネットワーク（コモン・フューチャーズ・フォーラム）に参加するほか、現在若者の組織を設立しようとしている。私は、社会が信頼と思いやりと愛のつながりを強化するためには、平和と民主主義を広め、社会・経済・文化・環境の持続可能な開発を推進する強い責任感が必要であることを学んだ。

青年時代とは、学び、人生における自分の役割を発見し、家族の絆を強め、地域に貢献する時期である。考え、書き、批判し、発言し、夢見、創造する能力を開発する素晴らしい時である。利己主義と孤立を避け、注意深く、賢明になり、疑いを克服し、根本的な問題に対し、自己の中に深く答えを見い出さなければならない。私は、私の世代の仲間を信頼している。私たちの世代は、既成概念をやぶり、精神的、道徳的革命を押し進め、人間の平和な共栄共存というすばらしい目的を達成するため、他の人々に呼びかけ、地球同盟を結成してゆくのである。

エピローグ

私たちの世代たちは、世界を新たに形づくるための、智恵と資源と自由と意志を持った最初の世代となるだろう。勇気と英知と創造力を駆使し、率先して、新千年紀の共通の未来を創造していかなければならない。地球とその多様な生態を保護し、性別、文化、世代を越え、全ての人々が幸せで、健康で平安な生活を楽しむ機会をわかちあいながら。

私たちは、人生の大半を次の世紀に送るのだから、心と視野をひらき、アイデアや興味や価値感を語り合い、新しい平和の文化をゆたかなものとするために、協力関係を築いていこう。人間の貧困や廃絶と戦い、悲しい思い出を克服し、倫理的責任を認識し、未来の世代の幸せのために種を蒔くために心をあわせ共に働こう。

今や、地球の全市民がその能力と人生のクオリティをフルに開発する時に来ている。平和と繁栄の社会、希望と愛をもって夢見た私たちのユートピアは、21世紀に私たちを待っている。

平和学の確立を

(原文)

後藤 薫 (20 歳)

岐阜県岐阜市

立命館大学 1 年

教科書で覚える単語や西暦年がある。「東条英機」が組閣した年とか、「終戦」の年。国民総動員令、日中戦争が、朝鮮合併とか。それらの単語は、私にとって受験用に暗記したものだ。単語があって、その中身は学ぶ必要がなかった。それが「戦争」が何故始まったのか、平和主義者が拘束、あるいは冤罪で処刑された歴史など考えも及ばなかった。

それを私に指摘したのは、米国からの「帰国子女」(この単語には違和感がある)の、私の大学での同級生の A 君だった。彼は中学二年から米国で教育を受けた。彼だけが特にこの国の現代歴史に興味があった訳ではない。米国は歴史に学習の重点をおいている。日本の古代から現代までの歴史教科書の十倍近い詳細な教科書を必須科目としてある。移民国家にとって、数学以上なのだ聞いた。勿論、彼は私の歴史認識を上回っていた。

それは、人間の行為である歴史が、現在を語り、未来を予測する知恵なのだ。だから、平和のあり方が最大のテーマだと言う。政治学・経済学・地政学など多くの学問の集大成が「平和論」へと向かって研究され、原子物理学の第一人者すら、究極の回答を「平和」への論証だとしている。そのため、知恵者たちは平和教育を強調している。

私はその意見に同調する。これまで、人間は教育によって新しい時代を作ってきた。

この国が世界に比せる程になった大きな要因は教育だ。平和教育を義務教育での必須科目として導入し、世界における平和教育の金字塔を建てるべきだ。人は学び実践する。平和は決して単なる自然体でない。「戦争論・戦略論」を優先するより、「平和論」が識論される機会や場所が必要だ。算数から数学へと高度になるように「平和」から「平和学」への確立をすべきだ。単に、「戦争反対」とのアピールだけでは何も生まれないのだ。

つまり、私たちが教育として学ぶことによって、多くの価値観を持つ者への共通の価値観を生み出せる。「平和」はその典型だ。平和には思想性も宗教性も入り込む余地はない。仮にそこにイデオロギーがあるとすれば、人間性を否定したものであることは歴史が論じている。

算盤を学ぶように、九九を学ぶように平和を学ぶ。屁理屈ではなく、人間にとって平和である意味を学ぶことは、多くの学問を取り入れた総合学なのだ。逆に、戦争での勝ち方すら学ぶ必要性も出てくるかも知れない。正論があれば、その逆説を学ぶことでも「平和」を知らなくてはならない。

ただ、時の感情で平和を学んでいけない。人間の記憶の不明確さと時の経過に流されてしまうからだ。そのためには、時の政治権力の意図から解放された「平和」を学ぶことが必要だ。それは人間として永劫の価値を確立できる機会でもあるからだ。